



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | "Invisible Presences" : Virginia Woolf and Life-Writing   |
| Author(s)    | 森田, 由利子   |
| Citation     | 大阪大学, 2001, 博士論文  |
| Version Type |   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/43319">https://hdl.handle.net/11094/43319</a>   |
| rights       |   |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

|            |  |
|------------|--|
| 氏名         | 森田由利子  |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文学)   |
| 学位記番号      | 第16548号  |
| 学位授与年月日    | 平成13年10月29日  |
| 学位授与の要件    | 学位規則第4条第1項該当<br>文学研究科英文学専攻   |
| 学位論文名      | “Invisible Presences”：Virginia Woolf and Life-Writing<br>(「見えない存在」—ヴァージニア・ウルフとライフ・ライティング—) |
| 論文審査委員     | (主査)<br>教授 玉井 瞳  |
|            | (副査)<br>教授 森岡 裕一 助教授 服部 典之   |

### 論文内容の要旨

本論文は、イギリス20世紀の小説家ヴァージニア・ウルフの文学を「ライフ・ライティング」(最も広義に解釈した場合の伝記、ないしは伝記的モチーフをもった作品・文章)の観点から読み直し、「ライフ・ライティング」がウルフ文学の根幹にいかに深く関わっているかを論じたものである。論文は、英語で書かれ、その全体は序論、5つの章、結論から構成され、本論、注、図版、参考文献を含めて、198ページからなっている。

序論は、ウルフのライフ・ライティング観が、彼女の時間感覚や歴史観と密接に結びついていることを明らかにする。論者は、自伝的回想録「過去のスケッチ」で触れられている「見えない存在」を、ウルフのライフ・ライティング観を検証する上でのキー・タームと捉え、それを、「過去の時代や、その各々の時代に生きた人々の人生」を意味するものと解釈する。しかもこの概念には、過去とは層を形成して残存するものと意識するモダニズム的感覚が窺えることを指摘する。

第1章は、ウルフのライフ・ライティングが、文学表現形式の一つのジャンルとして固有の特質をもっていることを論じる。論者は、『夜と昼』、『燈台へ』、『ジェイコブの部屋』、『波』などの小説や、書簡、日記、エッセイなどを取り上げ、伝統的な伝記的側面と新しい人生感覚にもとづいたフィクションナルな世界を志向する側面との間で動搖するウルフの文学的営為を描出し、その上で、この葛藤を克服して創出した新しい表現形式がライフ・ライティングであることを明らかにしている。

第2章は、ウルフにおいて、みずから伝記を読むという行為はいかなる意味をもっていたかを考察する。彼女が、生涯にわたり人物の伝記のみならず、人の住んだ家や空間の歴史・記録などを含めた多様な「伝記(lives)」を精力的に読み続けたありようを詳細に検証し、そこに想像的シーンを創りあげる傾向を指摘する。これは、ウルフの「ヴィジョンの瞬間」と相通じていて、究極的には、伝記の「読み」はモダニスト的創作行為であったと結論づける。

第3章は、ウルフの代表作『ダロウェイ夫人』において、ライフ・ライティングのモチーフがいかに表象されているかを論じたものである。小説世界は、時間的にも空間的にも現実世界のある一定の枠の中に固定されておりながら、テクストを通して描出される「ダロウェイ夫人の肖像」は明確な像を結ぶことがない点に注目し、ここにウルフの人生感覚を見てとっている。

第4章は、ウルフ文学に頻出する肖像画のモチーフを指摘し、そこに特定できる重要な特徴「顔のない肖像画」は、ライフ・ライティングのモチーフと密接に関わっていることを論じる。論者は、『夜と昼』、『歳月』、『幕間』などの

小説に登場する肖像画を取り上げ、ウルフが伝統的な肖像画のもつ歴史的記録としての機能に対してアンビヴァレンスを抱いていた側面を把握した上で、この事実的明確さを排除した「顔のない肖像画」はウルフ文学の本質を表象するものだと論じる。

第5章は、ウルフ文学と写真の関係を論じたものである。『フラッシュ』、『三ギニー』に触れつつ、特に、虚構の伝記『オーランドー』に添付された写真に注目し、そこに「写真」の孕む事実性を揶揄する面を指摘する。そして「写真」は、前章の「顔のない肖像画」のモチーフの対極に位置するものだと述べる。

以上の本論を踏まえて、論者は、「ライフ・ライティング」はウルフ文学の根幹をなすものであると結論づける。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文は、イギリス・モダニズム文学を代表する小説家ヴァージニア・ウルフの文学において、従来の研究ではあまり本格的に論じられなかった伝記的モチーフ「ライフ・ライティング」を取り上げ、この新しい着眼点からの考察により、ウルフ文学の根源的特質を捉え直すことに成功している。ウルフのモダニズムは、19世紀ヴィクトリア朝的なモチーフである伝記文学との間で、予想以上に激しい緊張・対立関係を保っていて、しかもアンビヴァレントともいえる面をも含んでいたことが明らかになり、このダイナミズムの中からウルフの新しいジャンル「ライフ・ライティング」が創出されていることが説得的に解明された。特に「顔のない肖像画」のモチーフがウルフ文学世界に深く浸透している多層的局面の解明はきわめて興味深く、また、論者が、本論において可視のものと不可視のもの、事実とヴィジョン、言葉と映像等のテーマに関して見せる洞察には、ウルフ文学の本質に触れる鋭いものを感じさせる。さらに、小説からエッセイ、書簡、日記にいたるウルフの膨大な全著作を視野に入れて、その中から自分の目で探し、発見し、確かめたテクスト上の証拠・メッセージを収集し、それらを基にして論を構築していく姿勢には、論者の学問的誠実性と論者ならではの一貫性・徹底性が窺え、それが本論をいっそう独創的なものにしている。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。論者は、ウルフのモダニズムに関してときどき自明のものとして論じる傾向がある、どこかでウルフのモダニズムの特徴を、特に他のモダニストとの比較において、明確に整理しておく必要がある。また、ウルフの著作からの引用があまりにも多く、また長くなることもあって、論の焦点が鮮明にならず、冗長な印象を与えるきらいがあるのが惜しまれる。

しかし、これらの点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。